

【研究論文】

幼児による「お手紙ごっこ」 活動の実態と保育者が考えるよさ

三田村 雅人

【要約】本研究の目的は、質問紙調査、A 保育園でのフィールドワークによって、園では「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」をいつどのように行っているか、幼児はどのような手紙を書いているか、保育者はどのように環境設定を工夫し幼児の活動への意欲を高めているかといった活動の実態を調査するとともに、活動のよさ、幼児が感じている活動の楽しさについて、保育者はどのようにとらえているかを明らかにすることにある。その結果、多くの園で手紙を書くことに加え、ポストへの投函や配達も行う「郵便屋さんごっこ」として活動を行っていること、ポストの設置や衣装の準備などで活動のリアリティを高めたり関連する絵本の読み聞かせをしたりすることなどで活動意欲を高めていること、幼児は手紙を書くこと読むことだけでなく、ポストに投函したり配達したりすることに楽しさを感じ、活動には5領域すべてに関わるよさがあると保育者はとらえていることなどが明らかになった。このことをふまえ、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」の今日的意義について考察した。

キーワード：幼児教育、お手紙ごっこ、郵便屋さんごっこ、保育者、楽しさ、活動のよさ

1 本研究の目的

「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」は、多くの園で行われている活動である。手紙を書いて届け、それを読むという形を基本とするごっこ遊びであり、文字を書く、読むという文字の習得に関わる遊びとしてとらえられることが多い。

横山、秋田、無藤、安見（1998）は、幼児がどのような手紙を書くのかということについて研究している⁽¹⁾。幼児が自発的に書いた手紙を7か月間収集し、誰が、どのように、誰に、何を書いているのかを分析すること、手紙を多く書いている幼児とあまり書いていない幼児の手紙をいつ、誰に、どのような形式で、何を書いているのか年中、年長の年齢別に比較分析することを行っている。主な結果として、幼児は手紙の形式的特徴を理解していること、幼児は自分の作品を送るものとして手紙をとらえていること、手紙を書くことのとらえ方は年齢によって発達的に変化すること、手紙を書くことに興味を持つ時期は幼児によって異なることなどが明らかにされている。この研究は1998年に行われたものであり、現在まで園で「お手紙ごっこ」が数多く実践されているにも関わらず、この研究以後、「お手紙ごっこ」について研究されたものはあまりない。また、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」は、手紙を書く、読む以外にも、宛名など表書きを書いたり読んだりすること、手紙を紹介されてほめられること、手紙をポストに入れたり配達

したりすることなど、様々な楽しさを内包しているごっこ遊びであると考えられるが、こうした幼児の感じている楽しさについて研究しているものもあまりない。さらには、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」の研究においては、幼児の手紙を分析することが中心で、保育者はどのようにして幼児の活動への意欲を高めているか、活動のよさを保育者はどうとらえているかといった保育者の視点から調査研究を行っているものもあまりない。

そこで、本研究では、幼稚園、保育所などで行われている「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」において、幼児はいつ、どのような手紙を書いているのかという幼児の活動の実態調査、保育者は幼児の感じている楽しさをどうとらえているか、どのようにして幼児の活動の意欲を高めているか、どのようなよさがあるととらえているかという保育者の立場からの調査を行い、その結果の分析をふまえて、活動の今日的意義、よりよい実践の在り方について考察することを目的とする。

2 質問紙調査の概要

質問紙調査の実施時期は2021年4月1日から4月30日である。質問紙調査の対象はE市内幼稚園7（市立3、私立4）、保育園10（公立3、私立7）、認定こども園14（公立5、私立9）であり、28園から回答があった（回収率90%）。調査内容は、園における「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」をいつ、どのように行っているか（何歳児のクラスか、表書きの項目は何か、手紙の本文に書かれているのは絵か文字か、誰に書いているか、返事は書くか）、保育者はどのように環境設定を工夫し活動への意欲を高めているか、保育者から見た活動のよさ、幼児が感じている楽しさは何かについて選択肢で回答するものが主な内容である。用語の定義として、質問紙においては「お手紙ごっこ」と「郵便屋さんごっこ」を区別している。手紙を書くことを中心に行っているのが「お手紙ごっこ」、手紙を書くことに加えて、手紙をポストに入れたり、配達したりするなどの活動も行っているのが「郵便屋さんごっこ」とした。調査に当たっては、園長宛ての依頼文によって任意での調査協力を依頼し、調査の趣旨、調査方法を説明して同意を得た。

3 質問紙調査の結果

(1) 園では「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」を行っているか

図1は、園で「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」を行っているかどうかという質問に対する回答の集計結果である。図1において、96%の園で「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」が行われていることが明らかになった。

図2は、手紙を書くことを中心に行っている「お手紙ごっこ」、手紙を書くことに加えて、手紙をポストに入れたり配達したりする活動も行っている「郵便屋さんごっこ」のどちらの形態で行っているかという質問に対する回答の集計結果である。図2において、「郵便屋さんごっこ」

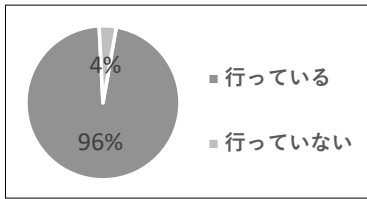


図1 実施状況

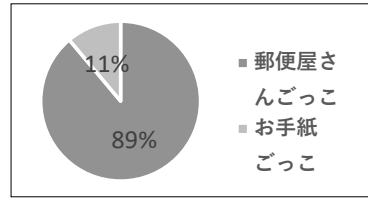


図2 実施形態

として行っている園が89%,「お手紙ごっこ」として行っている園が11%で,「郵便屋さんごっこ」として行っている割合が高いことが明らかになった。

(2) いつ, どのように「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」を行っているか

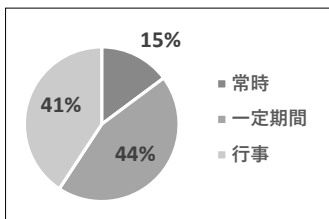


図3 実施時期

図3は, いつ「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」を行っているかという質問に対する回答の集計結果である。

図3において, 時期を決めず常時行っていると回答した園が15%, 一定期間を設定して行っていると回答した園が44%, 父の日や母の日, 敬老の日, 敬老の日, クリスマス, お正月(年賀状)などのイベントで行っていると回答した園が41%となっており, 一定期間を設定して行っている園, イベントの中で行っている園の割合が高いことが明らかになった。

図4は, 手紙の表書きに何を書くかという質問に対する回答の集計結果である。

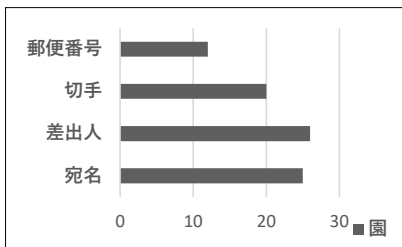


図4 表書き

図4において, 表書きには差出人を書く園が26と最も多く, 続いて宛名の25となっている。ほとんどの園では, 手紙の表書きにこの2つの項目を幼児が記入している。また, 切手を貼る(切手の絵を書く)という園も20と多く, 郵便番号も4割以上の園で書くようになっており, 本物の手紙に近い形で表書きを書いている園の多いことが明らかになった。

図5は, 「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」を何歳児のクラスで行っているかという質問に対する回答の集計結果である。

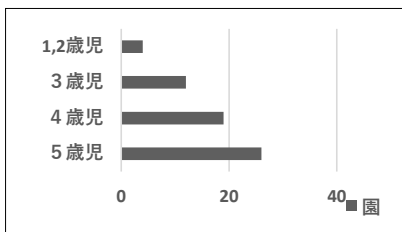


図5 実施クラス

図5において, 5歳児で行っている園が26と最も多く, 続いて4歳児が19, 3歳児が12となっている。1,2歳児のクラスで行っている園も4園あった。文字を覚え始める4,5歳児クラスで行っている園が多いが, 好きな絵や送りたい絵を自由に書く, 保育者が表書きを代わりに書くなど年齢に応じた工夫や支援を行い, 年齢の低いクラスも含めて園全体で行っている園のあることが明

らかになった。

(3) どのような手紙を書いているか

4, 5歳児の手紙に関して、次のような調査を行った。書かれているのが絵か文字かについては、すべての園が「主に文字と絵の両方を書いている」と回答している。誰に対してお手紙を書いているかでは、園の友達と回答する園が25と9割を越えている。また、返事については、書くことが多いが24、あまり書かないが3となっており、一方通行ではなく、幼児相互の手紙のやりとりのあることが明らかになった。

(4) 保育者は、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」への幼児の活動意欲をどのように高めているか

表1 活動意欲を高める工夫

回 答	園
ポストを設置する	26
切手やスタンプを準備する	21
郵便、手紙に関する絵本の読み聞かせをする	17
「お手紙ごっこ支援キット」を活用する	16
実物の手紙、年賀状、カードを見せる	15
郵便屋さんの衣装を準備する	11
お手紙を読み上げたり掲示したりする	11
手紙に関する幼児の生活体験を想起させる	10
郵便局に見学に行く	10

表1は、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」への幼児の活動意欲を高めるために保育者はどのようなことを行っているかという質問に対する回答の集計結果である（複数回答可）。

ごっこ遊びにおいては、環境設定の工夫が大事であるが、ポストの設置が26と最も多く、切手やスタンプの準備、「お手紙ごっこ支援キット」の活用、郵便屋さんの衣装などの準備といった環境設定の工夫も多く挙げられている。16の園が活用している「お手紙ごっこ支援キット」は、日本郵便株式会社が、「お手紙ごっこ」というごっこ遊びを通して気持ちを伝える楽しさや手紙を受け取る喜びを体験することが重要である⁽²⁾として提供するものである。内容は、ガイドブック、紙製ポスト、あいうえお表、絵本風冊子「おてがみがとどくまで」、はがき風カード、切手風

シール、消印風スタンプ、スタンプ台、お手紙バックからなる。

「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」に対する幼児のイメージを確かなものにし、広げるために保育者が行っているのが、絵本の読み聞かせ、実物の手紙の提示、郵便に関わる生活体験の想起、郵便局の見学である。特に絵本の読み聞かせは17の園で行われており、複数の園から挙げられた絵本が表2の絵本である。それ以外にも、「ネコのおてがみ」「おてがみ」「ゆきだるま

表2 読み聞かせ絵本

回 答	園
「ゆうびんです」	6
「おてがみで一す」	4
「てがみをください」	4
「ゆかいなゆうびんやさん」	3
「おてがみちょうだい」	3
「こんにちは おてがみです」	2

のてがみ」「ゆうびんてがみのひみつをたんけん」「ゆうびんやさんのホネホネさん」「おてがみがとどくまで」といった絵本が挙げられている。

(5) 「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」において幼児が楽しいと感じていることを保育者はどうとらえているか

表3 保育者がとらえた楽しさ

回答	園
手紙を書くこと	26
手紙をもらうこと	24
配達すること	24
ポストに投函すること	21
返事を書くこと	13
切手を貼ったり表書きを書いたりすること	8
手紙を先生に紹介してもらうこと	5

表3は, 「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」において, 幼児が楽しいと感じているのはどのようなことだと保育者はとらえているかという質問に対する回答の集計結果である。

「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」の中心になる活動は, 手紙を書くことであり, その手紙を受け取って読む(見る)ことである。表3において, 最も多くの保育者がその

二つの活動を幼児は楽しいと感じているととらえているが, 配達すること, ポストに投函することも, 手紙を書く, 手紙をもらう活動と並んで, 楽しみとしているととらえている。

(6) 保育者は「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」のよさをどうとらえているか

表4 保育者が考えるよさ

回答	園
平仮名を書いたり読んだりすること	23
思いを絵や文字で表現し伝えることを楽しむこと	23
ごっこ遊びの楽しさ, 充実感を味わうこと	20
友達と触れ合い, よい関係を築くこと	17
手紙や郵便に親しみ, 社会とつながること	13

表4は, 保育者は「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」のよさをどうとらえているかという質問に対する回答の集計結果である。

表4において, 活動のよさとして保育者が最も多く挙げているのが, 平仮名を読んだり書いたりすることと思いを絵や文字で表現し伝えることを楽しむことの二つである。「お

手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」は, 幼児が平仮名を書いたり読んだりする必然性のあるよい活動であると保育者はとらえているが, 言葉(文字)に関するだけでなく, 表現すること, 遊びにひたること, 人間関係を構築すること, 環境に働きかけることなど, 5領域に関わる多くのよさがあるととらえていることが明らかになった。

4 A 保育園におけるフィールドワーク

(1) A 保育園における「郵便屋さんごっこ」の概要

A 保育園で行われている「郵便屋さんごっこ」について, 電話での聞き取りを2020年10月8

日と2021年1月18日、フィールドワークを2021年1月27日に実施した。

E市内には31の園があり、それぞれの園のHPには様々な活動の様子が紹介されているが、「郵便屋さんごっこ」の活動について掲載されているのはA保育園のみである。A保育園では、お正月の年賀状のやりとりをふまえ、1月に「郵便屋さんごっこ」としての活動を年間活動計画に位置付け、実施している。また、1歳児（ひよこ組）、2歳児（りす組）、3歳児クラス（うさぎ組）、4歳児クラス（きりん組）、5歳児クラス（らいおん組）のすべてのクラスで年齢に応じて「郵便屋さんごっこ」の活動を行っている。1～3歳のクラスでは、はがきの表書きを保育者が代筆し、幼児は裏に絵を書いて活動を行う。4～5歳児のクラスは表書き、裏面の手紙の部分を自分で書き、特に5歳児は「郵便屋さんごっこ」に関する製作活動、係活動も行う。

(2) A 保育園の「郵便屋さんごっこ」の特色

A 保育園では、「郵便屋さんごっこ」として活動を設定しているため、幼児が行うのは手紙を書いて渡すだけではなく、「郵便屋さんごっこ」の活動の準備段階として主に5歳児が二つのものづくりを行う。まず、郵便屋さんが配達する時の衣装として、帽子づくりを行う。青いつやのある厚紙に帽子の型（頭にかぶる部分とつばの部分）を鉛筆で下書きし、はさみで丁寧に取り抜き、組み立てていく。正面には郵便の赤いマークもつけ、本物らしく工夫する。帽子ができあがったら幼児はすぐにかぶり、かっこいいとお互いに見せ合う。そして、早く「郵便屋さんごっこ」をしたいと口々に話をする。もう一つ準備物として作るのが切手である。手紙には、切手をはり、宛名を書き、差出人を書くことを知った後、幼児は切手づくりを行う。用紙は白色や薄い青色なので、切手は目立つ濃い色の模様や地色の千代紙を使い、はさみで本物の切手と同じ大きさに切って作成する。

また、5歳児は「郵便屋さんごっこ」において、3つの係を分担する。1つ目は「はんこ係」である。はがきにはられた切手にスタンプを押す活動を行うが、表書きをチェックするのも「はんこ係」の仕事である。「ちゃんと名前が書いてあるかな」「切手はってないよ」「よしOK」などの会話を交わしながら、幼児は活動に取り組む。

2つ目は「仕分け係」である。ポストからいったん全員分のはがきを集め、集めたはがきの表書きを読み、クラスごとに仕分けする活動を行う。「どのクラスかな」「これはらいおん組、これはうさぎ組…」「友達と協力して分けられてよかった」などの会話を交わしながら、活動に取り組む。

3つ目は、「配達係」である。青い帽子をかぶり、郵便屋さんになってクラスごとに仕分けされたはがきを配達する活動を行う。A 保育園では、全員がはがきを入れるポストとは別に、壁に赤いポケット状のものを設置し、一人ひとりのポストとしている。「配達係」は、「うーん、誰あてかな」「〇〇ちゃんへの手紙だ」「しっかり名前を読んで配達できたぞ」などと会話しながら一人ひとりのポストに手紙を配達する。

3つの係活動に共通するのは、平仮名を必然的に読むことが必要な活動となっているということである。「はんこ係」は、宛名や差出人が書いてあるかどうかをチェックする仕事もするため、平仮名を読むことが必要となる。「仕分け係」「配達係」は、宛名をしっかりと読まないとクラスごとに仕分けしたり一人ひとりに配達したりできないので、平仮名を読むことが必要となる。

(3) A 保育園で書かれた手紙

表5 A 保育園の手紙

年齢		4 歳児	5 歳児
調査数		18 通	24 通
表書き 4 項目		18 通 (100%)	24 通 (100%)
内容	絵のみ	15 通 (83%)	15 通 (62.5%)
	絵と文	3 通 (17%)	9 通 (37.5%)
文の記述内容		だいすき 2 通 お礼 1 通	だいすき 7 通 約束 2 通
宛先	幼児	17 通 (94%)	22 通 (92%)
	先生	1 通 (6%)	2 通 (8%)

A 保育園の「郵便屋さんごっこ」において、4歳児、5歳児クラスで書かれた手紙（2021年1月27日に書かれたもの）を分析した。主な分析項目は、表書き4項目（切手をはっているか郵便番号・宛名・差出人が書かれているか）、手紙の内容（絵のみか文も書かれているのか、文で記述されている内容はどのようなものか）、宛先（幼児宛か先生宛か）である。分析した結果が表5である。A 保育園の幼児は、後述するように手紙を文字や絵を書いて友達に送るもの

ととらえているので、絵のみが書かれている手紙が多く、「文の記述内容」分析結果の数が少なくなっている。

(4) 横山らの手紙の分析結果と A 保育園の手紙の分析結果との比較

前述した幼児の手紙についての先行研究（横山・秋田・無藤・安見，1998）と A 保育園の手紙を比較する。

横山らの分析した手紙と A 保育園の手紙の共通点は、幼児は手紙に文字を書くということにこだわらず、絵を書いたり白紙のままにしておいたりし、書いた手紙は主に園の友達に宛てて出すという点である。内容について、横山らの手紙の分析では、絵のみや白紙の手紙が8割であるのに対して、A 保育園は7割である。宛先について、横山らの分析では、友達に宛てて書かれている手紙が8割であるのに対して、A 保育園では9割となっている。横山らは、用事などを伝えるという本来の手紙の機能を考えると、絵のみの幼児の手紙は「手紙」と言えないかもしれないが、幼児の手紙は「『手紙を書く』といった実践の中で書かれ、(中略)『手紙』としてポストに投函したものである」としているが、幼児は間違いなく友達にあげる手紙と意識して紙に絵を書いているのであり、「幼児は『手紙を書く』活動を『文書によるメッセージ伝達』とは捉えておらず、『特定の誰かに自分の描いた作品をプレゼントする』ものと捉えていると推察できる」のである。

横山らの分析した手紙と A 保育園の手紙の相違点の1点目は、白紙の手紙の有無である。横山らが分析した手紙では、白紙が34.5%あるのに対して、A 保育園では全部の手紙に絵が描かれて

おり白紙は0である。2点目は、手紙に書かれた文の内容である。横山らが分析した手紙において、文で記述されている内容は遊びの「約束」が最も多いのに対し、A 保育園では、絵に添えられる形で「○○ちゃん だいすき」などと書かれたものが最も多い。これらのことから、A 保育園における幼児が手紙を書く活動では、前述した「特定の誰かに自分の描いた作品をプレゼントする」という意識が、先行研究の園以上に高いと考えられる。3点目は、表書きである。横山らの先行研究では、表書きの宛先は97.3%、差出人は93.6%記載されているが、「きって」は53%、郵便番号は0%であるのに対して、A 保育園では宛名、差出人、切手、郵便番号の4項目すべてが100%となっている。横山らは、「園での実践には不可欠な『誰に、誰から』といった項目への記載率は年中、年長を問わず9割を超えていたが、園では必要ないが実際の手紙には不可欠な『郵便番号』の記載は見られなかった」ことから、「幼児は『幼稚園での手紙の書き方』を習得しており、一般的な手紙としてではなく、『幼稚園での手紙』という意識で手紙を書いていることが示唆される」としている。それに対して、A 保育園では、郵便屋さんごっことして、より本物の郵便配達に近い環境設定がなされ、手紙を書く活動が行われていることもあり、先行研究のような「幼稚園での手紙」という意識からではなく、「一般的な手紙」（プレゼントするという意識ではあるにせよ）という意識で幼児は手紙を書いているのではないかと考えられる。

5 考察

(1) 「お手紙ごっこ」と「郵便屋さんごっこ」

E 市内の幼稚園、保育園、認定こども園では、手紙を書くことを中心に行う「お手紙ごっこ」は少なく、9割近くの園が、手紙を書くことに加えて、手紙をポストに入れたり配達したりする活動も行う「郵便屋さんごっこ」として実践している（図2）ということが明らかになった。「お手紙ごっこ」と「郵便屋さんごっこ」は、ねらいが異なる活動であり、ねらいに応じてどちらかの形で実践するのかを考えるべきものであると考えられる。

「お手紙ごっこ」は、文字を書いたり読んだりする必然性のある活動であり、文字の便利さ、有用性を実感できるよさがある。それに対し、「郵便屋さんごっこ」には、手紙に文字や絵を書いたり手紙をもらって読んだりするだけでなく、いろいろな活動が含まれるため、幼児が楽しめる場面を多く設定でき、身に付けられることも多いというよさがある。幼児は、手紙を書いたりもらったりすることと並んで、手紙をポストに投函したり配達したりすることを楽しんでおり、手紙に切手を貼ったり表書きを書いたりすること、手紙を先生に紹介してもらうことを楽しんでいる幼児もいる（表3）と保育者はとらえている。さらには、E 市内のA 保育園のように郵便屋さんの帽子や切手を幼児が製作している園もあるし、幼児がポストを製作している園もある。こうした製作活動を設定できることも「郵便屋さんごっこ」のよさである。

幼児の中には、文字を書きたい子もいれば、絵を書きたい子もいる。じっとしていることが苦

手で物を作ったり配達したりするなど体を動かしたい子もいる。こうした様々な幼児の活動の好みに対応できる活動を設定することで、多くの幼児が楽しめる活動とすることができることが「郵便屋さんごっこ」のよさであり、そのため多くの園で「郵便屋さんごっこ」の形で活動していると考えられる。

(2) 実施年齢

「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」は、何歳から実施するとよいのであろうか。E市内の幼稚園, 保育園, 認定こども園では、「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」を、平仮名を書くことができる4, 5歳児クラスだけでなく、文字が書けない1～3歳児クラスにおいても行っている園のあることが明らかになった(図5)。

藤岡, 秋田, 無藤, 安見(1995)は、「子どもにとっての『お手紙ごっこ』の楽しさは『文字によるメッセージ』を伝達するということにはなく、特に年中児にとっては、文字, 絵への興味, そこから生まれる『書きたい』『送りたい』『もらいたい』といった欲求を体験する点にある」とし⁽³⁾, 「お手紙ごっこ」の在り方として、「子どもが興味を持った時には、いつでも書ける環境が準備されていることが望ましいと考えられる」としている。手紙には文字を書かなければならない、表書きの宛先や差出人が書けないから文字が書けるようにならないと「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」はできないという固定観念があると、1～3歳では実施できないということになってしまう。A保育園では、1歳児から「郵便屋さんごっこ」の活動をしている。1～3歳児の手紙を見たが、表書きは保育者が幼児の代わりに書いており、裏面には幼児によって絵や模様がのびのびとカラフルな色使いで書かれていた。また、5歳児による様々な「郵便屋さんごっこ」の活動の様子を見て、1～3歳児は自分たちも大きくなったらやりたいと思っているようである。A保育園では、年齢に応じた保育者による適切な支援によって、それぞれの年齢なりに「お手紙ごっこ」を楽しんでいる。

幼児は手紙に書くものを文字, 絵にこだわっておらず、「特定の誰かに自分の描いた作品をプレゼントする」という意識で書いている。年齢に関わらず、幼児が文字や絵を書きたい、友達にそれを送りたいと考えた時に、「お手紙ごっこ」, 「郵便屋さんごっこ」を行うことができるように環境を整えておくことが大切であると考えられる。

(3) 環境設定の工夫

三田村(2020)は、保育における平仮名の指導では何を大事だと考えているのかという意識調査を保育者, 小学校1年生担任の双方に行った⁽⁴⁾が、平仮名に関する遊びについての自由記述の中に、手紙のやりとりをするだけでなく、年長児が郵便屋さんとなって配達もする「郵便屋さんごっこ」の方が読み書きが上達していると感じるという記述があった。なぜかは書かれていなかったが、これは、活動のリアリティを高めることで幼児の活動意欲が向上し、より価値のある

遊びとなった例であると考えられる。

E市内の幼稚園、保育園、認定こども園では、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」への幼児の活動意欲を高めるために、ポストを設置する、切手やスタンプを準備する、郵便屋さんの衣装を準備する、日本郵便株式会社が提供する「お手紙ごっこ支援キット」を活用するなどの環境設定を工夫していることが明らかになった（表1）。また、実社会の郵便に目を向け、確かなイメージを持たせる活動として、手紙などの実物を見せる、郵便に関する体験を想起させるなどに加えて、幼児が郵便局に見学に行く園もある。郵便局の施設や働く人の姿に触れ、お話を聞くことなどを通して実社会とつながり、本物からの刺激によって、幼児の活動意欲はより高まると考えられる。お手紙の表書きにおいても、宛名、差出人だけでなく、切手、郵便番号を記入するようにしている園が多い（図4）。こうしたことが、幼児の活動意欲の向上につながるのには、環境設定の工夫により、活動のリアリティが高まったからであると考えられる。

阿部（2010）は、A幼稚園の「しんぶんしゃ」の活動を報告している⁽⁵⁾。A幼稚園では、幼児はビデオカメラでニュースを読む姿やステージショーを撮影する「A（幼稚園）TV」という活動を行っていた。その中で、新聞にあるテレビ欄がほしいという声が幼児から出て新聞づくりが始まった。幼児は本物の新聞に近づけたいと考え、ロゴを作り、お店屋さんごっこをしている幼児から広告をもらい、取材した内容やお知らせ、天気予報などを掲載してページを増やしていった。注目すべき点は、阿部がこの活動に新聞記者を介入させたことである。新聞記者は、新聞づくりの専門家としてアドバイスをを行い、A幼稚園の新聞づくりは、よりリアリティのある活動に発展していった。本物の新聞記者の活動を見せてもらい、アドバイスをもらうことで、作っている新聞が本物に近づいていく、活動のリアリティが高まっていくことは、幼児の興味関心、意欲を高め、本物に近い新聞を書けたという大きな満足感をもたらした。阿部は既存の教科の枠組みの中で幼小連携を考えるのではなく、幼稚園、小学校双方がどう実社会とつながりうるかという観点から連携を見直すことも模索すべきであるとしている。「郵便屋さんごっこ」の活動は、郵便の仕組みに触れ、社会とつながるものであり、環境設定の工夫によって活動のリアリティを高めることで、活動のよさがより高まると考えられる。

6 「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」の今日的意義

(1) 手紙の価値

手紙について、辞書には「用事などを記して人に送る文書」などと書かれているが、情報伝達手段としての手紙の利用は、携帯電話や電子メールの普及とともに減少してきている。そうした状況にある手紙を「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」として幼児教育で取り上げる意義はあるのだろうか。

日本郵便（2018）の調査によると、国内の郵便物の数は、2001年度の262億通がピークであり、

2017年度は172億通と大幅に減少（16年間で34.5%減少）している⁽⁶⁾。郵便のニーズについては、「昨今の通信手段の多様化により、郵便を取り巻く環境が変化しており、郵便に求められているニーズにも変化が生じている」とし、従来から郵便に求められていたニーズのうち、低廉性、同報性、迅速性は電子メールに代替、秘密性、一覧性、確實性、簡便性は電子メールとほぼ同等であるのに対して、現在も郵便に求められるニーズとして、儀礼性（丁寧さや礼儀正しさを示したい）、現物性（現物そのものを届けたい）の2点が挙げられている。

大江（2007）は、手紙の今日的意義を考察するため、手紙と携帯メールの利用理由の回答データを因子分析し、潜在的視点の抽出を試みている⁽⁷⁾。その結果、手紙の利用にあたっては、周辺影響因子、記録・確實因子、儀礼因子、楽しみ・付加価値因子が抽出され、最大の寄与率を示す因子として、親や学校教育の影響、手紙を書く友人関係の影響という社会ネットワーク的要素が把握されたとしている。また、手紙に関する大学生へのインタビューから、情報伝達手段としての手紙はより高尚なものにとらえられており、手紙を書くのは「ここぞというとき」であること、書き慣れていないことの新鮮さやめんどくささも含めて、思いを伝える代理言語としての手紙の価値を認めていること、手紙を「切手を貼付の上、投函する通信媒体としての性格を兼ね備えるメディア」として認知していることなどが明らかになったとしている。

現代社会において、手紙をやりとりする機会は減っているが、電子メールなどとは異なる手紙のよさ、例えば丁寧さや礼儀正しさが伝わるもの、ここぞという時に思いを伝えるものとして、手紙の価値は現代社会においても認められており、それが手紙を書くことの今日的意義となっていると考えられる。「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」における、手紙を書いたり受け取って読んだりする活動は、幼児にとって特別感のあるものであり、思いを届ける、受け取る大切な活動と考えられる。

(2) 文字を書く必然性

平仮名の書きの習得の早期化は、島村・三神（1988）の実態調査から明らかである⁽⁸⁾。島村らは1967年の国立国語研究所の調査と比較するため、1988年、同じ内容の平仮名の読み書きの調査を東京都と愛知県の幼児を対象に行っている。平仮名の書きにおいて、1988年の4歳児の成績は、1967年の5歳児に近いものであった。また、清音、撥音の46文字においても、濁音、半濁音を加えた71文字においても、1967年と比較して1988年では書ける平仮名が1.6倍に増えている。

三田村（2020）の質問紙調査において、「小学校入学までに平仮名を書くことができるように指導することは大事か」という質問に対しては、保育者の67%が「とても大事」「大事」と回答しているのに対し、小学校1年担任のうち「とても大事」「大事」と回答している割合は36%であり、保育における平仮名を書く指導については、保育者と小学校1年担任とで意識に差があることが明らかになっている。保育者は、小学校就学後に幼児が平仮名を書けなくて困ることがないように

にしたいと考え、小学校1年担任は、平仮名を書けなくても読むことができれば小学校生活を送る上で支障がないと考えていることが意識の差となっていると考えられる。では、保育者と小学校1年担任の共通する思いは何かというと、書きたい、伝えたいという平仮名を書く意欲を高める遊び、平仮名を書く必然性のある遊びが大切であるということであった。

首藤（2013）は、「言葉や文字を使って伝え合う相手がいる場で、子どもは言葉や文字を使うことの意義を感じ取り、自分でも言葉や文字を使おうとして、幼い子なりの話し方で話し始めたり、書き始めたり、読み始めたりするのである」とし、就学前の5歳4か月の兄と3歳11か月の弟が協力して書いた置き手紙を例に挙げている⁽⁹⁾。手紙は外出している母親に宛てて、兄弟二人で外に遊びに行くことを伝えるものである。書く際には絵入り平仮名表から必要な文字を探し、弟が指で押さえた文字を兄が書き写すという共同作業によって書かれた。実際の手紙の文面は「おかあさんえそとえいつていますかぎわしんぶんいれるところえいれていれます あきひさより」と読めるものである。文字の間違い、重複があり、句読点もない手紙であるが、「この手紙を通して、子どもの心が母の心に通じたのである。生活の中で幼児が文字を役立てた好例である。こういう、通じ合いの景観が、文字の働きを実感させ、文字への親しみを一層深くするのである」としている。前述した三田村（2020）の文字に関する指導の意識調査の中で、園一押しの文字に関する遊びを自由記述してもらったところ、一番多く挙げたのが、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」であった。「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」は、心の通じ合いのある、平仮名を書く必然性のある遊びであると考えられる。

(3) 小学校との接続

「小学校学習指導要領（平成29年告示）国語」の「第1学年及び第2学年の内容」の「書くこと」には、言語活動例として「イ 日記や手紙を書くなど、思ったことや伝えたいことを書く活動」が挙げられ、「手紙とは、特定の相手に対し、要件や気持ちなどを文章で伝えるものである。相手を明確に意識できるため、児童自らが推敲する必要性を実感して書くことのできる言語活動例である。」と解説されている⁽¹⁰⁾。すべての教科書会社の低学年の小学校国語の教科書には、表6のように手紙を書く単元が設定されている。

光村図書の手紙の単元「てがみでしらせよう」では、児童は誰にどんなことを知らせようかと考え、うれしかったことや楽しかったことを知らせるため手紙を書く学習活動を行うことを通し

て、簡単な手紙の形式や内容について学習する。また、誰に対する手紙かを意識して書くという手紙の特徴から、書き終わった時に知らせたいことが相手に伝わるように書かれているか読み返す習慣をつけ、推敲することができるようにすることがねらい

表6 各教科書の手紙を書く単元

教科書会社	学年	単元名
光村図書	1年下	てがみでしらせよう
東京書籍	2年下	「ありがとう」をつたえよう
教育出版	1年下	ころぼかぼか手がみをかこう
学校図書	1年下	ありがとうをとどけよう

となっている。

園での「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」の楽しかった経験は、小学校での手紙の学習につながってくる。「てがみでしらせよう」の単元の導入では、手紙を書いたりもらったりした体験を思い出し、もらってうれしかった、自分も書きたいと思ったという気持ちを確認するが、園でこうした体験、思いがあることにより児童は自発的、意欲的に手紙を書く学習に取り組むことにつながるのである。また、光村図書学習指導書の「単元設定の趣旨」には、「手紙は、1年生の児童にとって、わくわくする学習活動である」、「自分が少し大人になったような快さを感じる」、「手紙を書くことを通じて、相手に気持ちを届けることを意識させ」とある⁽¹¹⁾が、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」で幼児が楽しいと感じる経験をすることで、小学校での手紙の学習でそうしたことをより強く実感できると考えられる。

小学校国語の物語文の教材にも手紙に関するものがある。アーノルド・ローベル作「お手紙」である。「お手紙」は、作品集「ふたりはともだち」から採られており、光村図書2年下、東京書籍2年下、学校図書2年下と多くの教科書の教材となっている。今まで一度も手紙をもらったことがないがまくんのために、かえるくんががまくんへの手紙を書き、かたつむりくんに配達を頼む。自分が手紙を書いたから手紙がきつと来ること、「ぼくは、きみがぼくの親友であることを、うれしく思っています。」などと手紙に書いたことを伝える。ふたりはしあわせな気持ちで手紙を待ち、4日後届いたお手紙を見て、がまくんはとても喜ぶ。手紙をもらえるうれしさ、「親友」といった手紙の内容が読み手に与えるうれしさ、手紙を出すことで友達をなぐさめられるうれしさ、こういった手紙に関わる気持ちの読み取りをする上で、園での「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」の楽しい経験をした幼児は、小学生になり、「お手紙」を学習する中で、登場人物たちの手紙に関わるうれしい気持ちをしっかり読み取ることができると考えられる。

(4) 「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」と5領域の関連

「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」には、どのようなよさがあるのであろうか。5領域及び「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」との関連において考える。

「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」において、幼児はお手紙をもらったら返事を書くというやり取りでは、思いを伝え合うことができている。幼児は文字や絵を媒体とした伝え合いを楽しんでいる。幼稚園教育要領(及び保育所保育指針)「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」の(9)「言葉による伝え合い」には「先生や友達と心を通わせる中で、(中略)、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる」とある⁽¹²⁾が、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」は、こうした幼児の姿へとつながる遊びである。また、文字については、(8)「数量や図形、標識や文字などへの関心・感覚」に「遊びや生活の中で、数量や図形、標識や文字などに親しむ体験を重ねたり、標識や文字の役割に気

付いたりし、自らの必要感に基づきこれらを活用し、興味や関心、感覚を持つようになる」とあるが、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」は、こうした文字への興味関心、必要感を大事にすることができる遊びである。この2つの姿と直接関連するのが、5領域では「環境」の内容（10）「日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ」、「言葉」の内容（10）「日常生活の中で、文字などで伝える楽しさを味わう」であるが、それにとどまらない。

幼稚園教育要領の第1章総則 第1幼稚園の基本には「幼児の発達は、心身の諸側面が相互に関連し合い、多様な経過をたどって成し遂げられていく」と書かれているように、「幼児期には、諸能力が個別に発達していくのではなく、相互に関連し合い、総合的に発達していく」（幼稚園教育要領解説）のである。例えば、「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」においては、(3)「協同性」（「互いの思いや考えの共有」）、(4)「道徳性・規範意識の芽生え」（「友達の気持ちに共感」）、(5)「社会生活との関わり」（「情報を伝え合う」「園内外の様々な環境に関わる」）、(10)「豊かな感性と表現」（「友達同士で表現する過程を楽しんだり」）などが、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」に結び付く姿と考えられる。

表7 5領域との関連

領域	具体的な内容	項目
健康	・手紙を書いたり配達したりして友達と温かく触れ合い充実感を味わう ・楽しんで手紙を書いたり、明るく元気に配達したりする	(1) (4)
人間関係	・手紙を通して友達のよさを感じ、一緒に遊ぶ楽しさを味わう ・手紙を通して思いを伝えたり、思いを受け取ったりする	(1) (4) (6) (7) (10)
環境	・郵便の仕組み、手紙の形式、書き方、よさについて知り、手紙に親しむ ・手紙を書いたり配達したりすることに関心を持つ	(6) (9)
言葉	・友達に関心を持ち、自分なりの言葉、表現で手紙を書く ・思いが伝わるように手紙を書き、伝える楽しさを味わう	(1) (2) (8) (10)
表現	・ポスト、切手やスタンプ、郵便屋さんの衣装などでお手紙ごっこを楽しむ ・自分の思いを絵や言葉で自由に表現する楽しさを味わう	(4) (5) (7) (8)

「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」のよさについての質問紙調査では、5領域に関連する5つの内容を設定し、その中から選択する形式で回答してもらったが、E市内の多くの保育者は、「平仮名を書いたり読んだりすること」だけでなく、「思いを絵や文字で表現し伝えることを楽しむこと」、「ごっこ遊びの楽しさや充実感を味わうこと」、「友達と触れ合いよい関係を築くこと」、「手紙や郵便に親しみ社会とつながること」も挙げており、5つすべてをよさとして選択し回答している保育者も多い（表4）。「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」について、5領域から見た具体的な幼児の姿、5領域の「内容」における関連項目についてまとめたものが表7である。「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」は、5領域のすべてに関連するよさを持つ活動であると考えられる。

(5) 5つの言語意識

河邊（2014）は、幼児教育の遊びとは何かについて、①自発性、②自己完結性、③自己報酬性に加え、「遊びの中で子どもはわくわくした緊張感や達成感、あるいは開放感や充実感を味わいながら、ある種の能力や見通しを獲得していきます。出発点は興味・関心をもった身近な環境との関わりであり、遊び手の自発性に支えられて展開」するという構造を持つとする⁽¹³⁾。「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」は、①～③の遊びの要件を備えているものであり、保育者は、様々な環境設定の工夫をし、幼児の「わくわくした緊張感や達成感、あるいは開放感や充実感」「興味・関心」「自発性」を高めていることが質問紙調査で明らかになったが、次に述べる5つの言語意識を高めることで、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」のよさをさらに高めることができると考えられる。

小森（1999）は、文部科学省の小学校国語の教科調査官であった時、「伝え合う力を育てるための5つの言語意識」の大切さを提唱した⁽¹⁴⁾。5つの言語意識とは、①相手意識（誰に対して、誰のためにその言語活動をするのか）②目的意識（なぜ、何のためのその言語活動をするのか）③場面意識（いつ、どこで、どのような状況でその言語活動をするのか）④方法意識（どのようなものによって、どのような方法でその言語活動をするのか）⑤評価意識（その言語活動をすることによって力がついたか、理解が進んだか）である。5つの言語意識が明確になっている言語活動には児童は意欲的主体的に取り組む。幼児の遊びにおいても、相手意識、目的意識を中心に①～④の4つの言語意識が明確な活動（遊び）には必然性があり、幼児が主体的に取り組むものとなる。また、幼児教育においても、「主体的・対話的で深い学び」が求められる今、遊びを通してどのような力がついたかという意識を持つことは必要であり、⑤評価意識も大事なものであると考える。「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」は、この5つの言語意識を明確にすることによって、活動の必然性が高められ、より価値あるごっこ遊びとなる活動であると考えられる。「新訂 事例で学ぶ保育内容 領域言葉」には、卒園を控えた3月、違う小学校へ行く友達に手紙を書くという事例が紹介されている⁽¹⁵⁾。事例の園は大学の附属幼稚園で大半の幼児は附属小学校に進むが、会話の中で友達のMちゃんは地域の別の小学校に進むことがわかる。そこで書いた手紙が「Mちゃんへ がっこうにいても あそんでね」というものである。別々の小学校へ行くけど、今まで通り仲良く遊んでほしい、ということを手紙であらためて伝えたいという思いから書かれたものである。書かされたものではなく、書く必然性があり、書きたい伝えたいという思いから書かれた手紙（相手意識、目的意識などの言語意識が明確な活動）の好例であり、思いを伝え合えた中で、手紙を書いた幼児、もらった幼児は文字を書くこと、手紙のよさを実感していると考えられる。

(6) 最後に

多くの園で行われている「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」であるが、環境設定の工夫で

さらなるよさを持つ活動になると考えられる。例えば、活動に関わる絵本の読み聞かせをE市内の園では1冊のみ活用している園が多いが、活動に合った複数の絵本の読み聞かせを活動の各段階で行うこと、E市内の園では10の園が実際に郵便局に見学に行っているが、郵便局が遠くで見学に行くことができない場合は郵便局の人をゲストティーチャーに招くこと、E市内の園では一定期間活動を行う園が行事と関連して行う園が多いが、自由に手紙をやりとりする活動と目的意識、相手意識などの5つの言語意識を明確にした活動とを組み合わせることなどの工夫をすることで、「お手紙ごっこ」、「郵便屋さんごっこ」は、幼児にとってさらに意欲が高まる、楽しく価値ある活動になる可能性を持つと考えられる。

謝 辞

質問紙調査にご協力いただいたE市内幼稚園、保育園、認定子ども園の先生方に心から感謝申し上げます。

引用文献, 参考文献

- (1) 横山真貴子・秋田喜代美・無藤隆・安見克夫 (1998) 幼児はどのような手紙を書いているのか? : 幼稚園で書かれた手紙の分析 発達心理学研究第9巻, 第2号
- (2) 日本郵便株式会社 (2020) お手紙ごっこ遊び支援キットのご案内「ごあいさつ」
https://www.post.japanpost.jp/promotion/tegami_kids/ (2021年2月20日最終閲覧)
- (3) 藤岡真貴子・秋田喜代美・無藤隆・安見克夫 (1995) 幼稚園における「お手紙ごっこ」活動 (4) 一子どもにとっての「お手紙ごっこ」の楽しさとは?—日本保育学会大会研究論文集 (48)
- (4) 三田村雅人 (2020) 幼児期の文字に関する指導 小学校との連携をふまえて 仁愛大学研究紀要人間生活学部篇第12号
- (5) 阿部学 (2010) 幼小連携の在り方に関する考察—小学校向け授業プログラムの保育への応用—千葉大学人文社会科学部研究第21号
- (6) 日本郵便 (2018) 郵便事業の現状について 総務省
https://www.soumu.go.jp/main_content/000571921.pdf (2021年2月13日最終閲覧)
- (7) 大江宏子 (2007) 多様化するメディアの中での手紙の意義—携帯メールとの利用比較調査を中心に—情報文化学会研究紀要 Vol.14
- (8) 島村直己・三神廣子 (1994) 幼児のひらがなの習得—国立国語研究所の1967年の調査との比較を通して—教育心理学研究第42巻
- (9) 首藤久義 (2013) 就学前読み書き指導の原理 千葉大学教育学部研究紀要 第61巻
- (10) 文部科学省 (2017) 小学校学習指導要領解説 国語編 東洋館出版
- (11) 光村図書 (2020) 小学校国語 学習指導書1下ともだち 光村図書出版
- (12) 文部科学省 (2018) 幼稚園教育要領解説 フレーベル館 厚生労働省 (2018) 保育所保育指針解説 フレーベル館
- (13) 河邊貴子 (2014) 幼児教育に求められる「遊びの質」とは何か これからの幼児教育2014年夏号 ベネッセ教育総合研究所
- (14) 小森茂 (1999) 「伝え合う力」の育成と音声言語の重視 明治図書
- (15) 無藤隆 (監修) 宮里暁美 (編者代表) (2019) 新訂 事例で学ぶ保育内容 領域言葉 萌文書林